

## 筑波大学における共通体育の カリキュラム編成の経緯と今後の問題

宮丸凱史\*

The details and the future problem of the curriculum organization of the  
general physical education at the university of Tsukuba

Masashi Miyamaru

今回企画されたFDにおいて発言の機会を与えられましたので、体育センターのカリキュラム検討に長く携わってきた者の一人として、「これまでのカリキュラム編成の経緯と今後の検討のための諸問題」について述べたいと思います。

まず、はじめに本学の共通体育のカリキュラムについてその経緯を振り返ってみたいと思います。ついで、これまでのカリキュラム検討の論議の中で大学での教養科目としての共通体育をどのように捉えようとしてきたのかを考えてみたいと思います。また、一昨年、東京大学の教養体育外部評価委員として、教養体育の評価に携わりその報告書の作成に関わりましたので、それを参考にして東京大学の教養体育では何をどのように教育しているのかということを紹介したいと思います。最後に、今後のカリキュラム検討の問題点をあげてみることにします。

### ●筑波大学における共通体育の経緯

本学でのこれまでの体育カリキュラムの経緯の概要は資料-1のようになります。

ご存知のとおり、昭和48年に開学されて以来ずっと4年間4単位必修でした。その間、体育の内容は「体育実技(理論を含む)」であり(今もそうなっていますが)、それがずっと続いております。しかし、授業開設科目はスポーツ種目中心の授業であったと考えていいのだらうと思います。開学当初から体育のカリキュラムの編成については、十分に理論的に検討されずにきたように思います。ただ、授業研究は継続的に行われて、大学体育研究をみましても、学習における「自己課題化」などをテーマにして授業改善に関する検討、勉強会、論文が数多く掲載されております。そういう状況が長く続いてきました。

その後、私の記憶では昭和62年ごろからですが、共通体育のカリキュラムの論議が始まりました。このときの体育センター長であった山川先生から指摘を受けたのは以下のようなことでした。第1には、「理論を含むとなっているが、体育理論をやっていないじゃないか」。第2は、カリキュラムの論議でいう「学習の発展系列(sequence)が明確ではない」ということ。すなわち、「学年進行にともなって4年間も体育を教えるのに、1年生から4年生までどう学ぶかという、学習の発展性、

\*筑波大学名誉教授、十文字女子大学

## 資料— 1

### 共通体育におけるカリキュラム問題

昭和48年開学当初から 4年間（4単位）体育必修  
体育実技（理論を含む）、しかし、スポーツ実技中心  
大学体育としてのカリキュラム編成は明確ではなかった？  
授業改善のための工夫・研究が討議された

昭和62年頃 共通体育のカリキュラム論議が始まる

2つの問題点の指摘

- ①体育理論がない（理論を含むとなっているが、実施していない）
- ② Sequence（学年進行にともなう学習の発展系列）が不明  
カリキュラム検討委員会で論議：現在の基本的な構成ができる  
目標・理念、Scope（学習内容）、Sequence（発展系列：学年目標）体育理論・講義、体力  
づくり実習（1年生）など

平成4年 大学設置基準大綱化にともなう大きな変革期を迎えるカリキュラム問題について  
論議・検討

必修単位数（2～4単位）、体育の1単位 30時間 or 45時間か？  
開設形態、自由科目の検討・開設

平成7年 外部評価を受ける

カリキュラムに関する評価と改善点を指摘される

学生のニーズに応える開設科目の多様さは評価するが、

- ①大学体育独自の理念・目標、内容を明確にする
- ②大学らしい新たな知の育成を図るため学生の知的関心に即した講義、演習を多くする
- ③自由科目の性格を再検討し、充実させる

平成9年 外部評価を受けて再びカリキュラム検討

カリキュラム全般にわたる検討（9回の検討委員会開催）

- ①開設科目のネーミング、内容、形態の検討
  - ②大学体育に相応しい授業のテーマユニット化（自然・文化・身体）の検討
  - ③1・2年次の講義、方法の検討
  - ④学群、MCとの授業開設の連携・協力の問題 教官のFDなど
- \*議論はしたものの、何ら解決を見ずに終わる

平成10年 大学体育改革専門委員会設置

体育教育の改革、スポーツ学習機会の増大などについて検討

他学系の教官から広く意見を聞き、改革委員会へ報告を提出  
実現したこと

- ①大学院体育の開設：今後に残す
- ②スポーツ施設の改善（ジョギングコースのみ）

平成11年 将来計画委員会で新たにカリキュラム検討

主として1年次体育（1学期のオリエンテーション中心に）の改革について検討

平成12年度から1年次体育が改められたが、再び再検討される

系統性がないじゃないか」、「1年生の授業も  
4年生の授業も同じじゃないか、これをどう  
するんだ」、という問題でありました。こうい  
う2つの大きな問題を提示されて、カリキュ

ラムの検討が始まりました。

その間いろいろなことを検討してきました  
けれども、実は、今シラバスに載っている共  
通体育の学習内容や各学年別の学習目標とし

て記載されている内容は、その時に始まった検討のままと言ってもいいかもしれません。それ以来新しくなっていないと思います。

その次、ご存知のように平成4年、例の大学設置基準の大綱化に伴って大きな変革期を迎えました。カリキュラムの問題も検討しましたが、要するに単位数が2単位から4単位まで、学群・学類によっていろいろ変わりましたし、一時は体育の1単位を30時間（2学期分の時間）でいいのじゃないかという議論もあったのですが、何とか45時間（通年で1単位）でということになりました。学習内容や授業の形態についていろいろ意見が出ましたが、結局、自由科目の開設をしたものの、カリキュラムそのものの基本的な改革はなかったわけです。

ついで、平成7年にはご存じのとおり外部評価を受けました。その結果、カリキュラムに関連して以下のような3つのことが指摘されました。1つは、大学体育独自の理念・目標とか内容をもっと明確にしろということです。2番目は、大学らしい新たな知の育成を図るために、学生の知的関心に即した講義や演習をもっと入れる必要があるということです。3番目は、自由科目をせっかくやっているのだから、その性格をもう少し明確にして充実させていったほうがいいのじゃないかということでした。他にも多くの指摘がありましたが、カリキュラムについてはこの3点に要約できるだろうと思います。

そして、平成9年にその外部評価を受ける形でカリキュラムの検討が始まりました。私は授業の開設科目におけるネーミングを変え、理論的な内容をも含めたものにしていこうという提案をしたことを記憶しております。9回ぐらい検討委員会を開きました。大学体育にふさわしい授業の内容にするために、授業をテーマユニット化しようという提案がされました。例えば「自然」、「文化」、「身体」、あるいは「環境」や「健康」など、そういう

大きなテーマのもとにひとつの授業の中に講義と実技を融合させていってはどうかというものでした。それから、1年、2年次の講義方法についても検討がなされました。また、学群、MCとの授業の連携を取っていくとか、教官のFDが必要だとか、さまざまな議論をしました。しかし、結果としては何も結論を見ずに終わりました。情けないことながら、検討委員会は実りなくして終わったというのが実態でした。

平成10年、大学改革問題のひとつとして大学体育改革専門委員会の設置が提案されまして、筑波大学の体育教育をどう変えるか、あるいは学内でのスポーツ学習の機会をどう増やすかということについて検討しようということになりました。いろんな答申をしたのですが、その結果産み出されたのが大学院の学生を対象にした体育授業の開設でした。もう一つは、施設を改善していくという提言で、多くの提案が出されましたが、実現したのはジョギングコースの設置だけでした。体育のカリキュラムについては、他学系の委員から現状を是認されたものの、具体的な改善の提案もなく終わっています。

最後に、平成11年度から将来計画委員会ができて、1年生のオリエンテーションをどうするかということが問題になりました。これはオリエンテーションの検討でしたけれども、実はカリキュラムそのものの検討であろうと思うのです。要するに入学してきた学生が何を、どういう順序で学ぶかということを検討してきたわけですから、まさにカリキュラムの問題だったと思っています。以上が共通体育のこれまでの経緯です。

#### ●大学における教養科目としての「体育」に関する論議

ところで、カリキュラム検討委員会では、大学の教養科目としての体育をどのように捉えたらよいか、そして、そのための依拠する

考え方はないか？ いろいろと検討してきました。それらのいくつかをあげてみたいと思います。

まず、大学の教養教育の理念・目標についてですが、大学審議会は「21世紀の大学像と今後の改革方策について」の中間答申（その概要は資料一2参照）の中で、「教養教育の重視と教養教育と専門教育の有機的な連携」という項目を取り上げ、教養教育の理念・目標を次のように記述しています。①学問の裾野を広げ、様々な角度から物事を見ることが出来る能力、②自主的・総合的に考え、的確に判断する能力、③豊かな人間性を養い、自分

### 資料一 2

大学審議会 21世紀の大学像と今後の改革方策について

(中間答申)

#### 第2章 大学の個性化を目指す改革方策

##### 1 課題探求能力の育成

##### (1) 学部教育の再構築

##### 2) 教養教育の重視、教養教育と専門教育の有機的な連携の確保

#### 教養教育の理念・目標

- 学問のすそ野を広げ、様々な角度から物事を見ることが出来る能力
- 自主的・総合的に考え、的確に判断する能力
- 豊かな人間性を養い、自分の知識や人生を社会との関係で位置付けることのできる人材の育成

社会の高度化、複雑化が進む中で、「課題探求能力」の育成が重要である

#### 課題探求能力とは？

主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探究し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的に判断を下すことのできる力

そのために、カリキュラム、授業方法などの一層の工夫・改善が必要

その際、専門教育と教養教育との有機的な連携の確保が重要

の知識や人生を社会との関係で位置付けることのできる人材の育成、の3つです。

社会の高度化、複雑化が進む中で、「課題探究能力」を育成することを教養教育の課題にしています。課題探求能力とは、「主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探究し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的に判断を下すことのできる能力」であり、それを育成するために教養教育のカリキュラムや授業方法などのいっそうの改善・工夫をしなければと述べています。これが、現在出されている大学の教養教育に対する提言の基本的な考え方であり、共通体育の理念・目標は身体運動を通じて自己の身体、健康、体力、生きがい、ライフスタイルと関連して、主体的な課題探求能力を育成することになると言えましょう。

次いで、昭和60年頃からのカリキュラム検討の中で議論してきたことの一つは、「学ぶということとは一体どういうことなのか」ということでした。人間は、環境としての世界の中に生き、行動している訳で、その中において人間が学ぶことは2つあるであろう（資料一3）。一つは「環境世界がいかにあるかを知ろうとする知の探究」であり、もう一つは「環境世界の中で、自分がいかに生きるべきか、

### 資料一 3

学ぶということ —知の追求—

「人間は、環境としての世界の中に生き、行動している」

- 環境・世界がいかにあるかを知ろうとする知の探究
- 環境・世界の中で、自分がいかに生きるべきか、いかに行動すべきかを知ろうとする知の探究

※これらは、互いに分離しようがなく、一体的にならざるを得ない。全一的な知の追求が必要となる。

#### 「体育」

よりよく生きるため、よりよく行動するための知の追求

教養教育の中の重要な科目

いかに行動すべきかを知ろうとする知の探究」であるとみるのです。この二つは互いに切り離しようがない一体的なものではありますが、そのように考えると、大学体育というのは、主として人間がよりよく生きるため、よりよく行動するための知の追求を目標にする教養科目のひとつであり、しかも、きわめて重要なひとつであると考えべきだと捉えました。また、大学での教育を大きく「専門教育」と「教養教育」に分けたとき、両者の有機的連携が求められます。「専門教育」は、それぞれ学生の専門分野の能力や将来の職業選択と関連する能力の向上をめざすものであり、「個々に固有な能力の向上」を意図するもの、あるいは、「有用性を求める教育」といえます。それに対して、「教養教育」は、人間の卓越性、完全性に向けての能力向上を目指す、いわゆる、自由学芸教育であって、人間にとって「本来的なもの」として捉えるべきでしょう。そこで、もう少し教養教育とは何かについて考えてみました。学問の専門分化構造のなかで、教養教育を重視し、位置付けるとき、「専門教育」の学問（デシプリン）に対してどのような関係として捉えるかということです。ひとつは、教養教育は専門の教育をするための予備的な教育という面があるかもしれませんが、決してそれだけではありません。つぎは、教養教育は幅広い学際的な教育ということに特徴をもつという面がありますが、それだけでは捉えられません。もっとも重要な捉え方として、教養教育は「全ての人が、もともと本来的に学ぶべきもの」という捉え方で、プロトデシプリナリー(Proto-disciplinary)な教育と考えるべきだということです(藤沢1990)。要するに、「人間がもともと学んでおかなければならないもの」、「人間として本来身につけているべきもの」を学ぶのが教養教育だということです。この捉え方を受けると、体育は、「本来、もともと学ぶべきこと」として位置づけられるでしょうし、大学の体育教育は

教養教育の中でもきわめて重要な科目と考えるべきでしょう。

その次に考えたことは、大学で体育を必修にするべき根拠は何かという問題でした。一昨年、東京大学の教養体育の外部評価に携わりました。東京大学では教養改革に伴って、教養教育の中に体育が必要かどうか、特に体育実技を入れるかどうかという議論がなされたようです。そこで、外部評価の報告書を作成する際に、私なりに大学の教養過程で体育を必修にするべき理由を以下4点にまとめてみました。参考資料(資料-4)としてあげておきます。

①ヒトは18歳でようやく形態、機能が完態に達するが、まだ十分な発達段階に達していない。18歳以降の10年間は少なくとも身体的機能はまだまだ向上する余地があり、むしろトレーニングビリティが高い。したがって、大学生に達したから体育はやらないというのではなく、それまで以上に体育実技を通して身体的能力を高める必要がある。

②小、中、高校では、主として発育・発達の刺激として必要な身体運動であったが、大学生に達したこの時期には、これからの長い人生を視野に入れて生涯にわたってスポーツを享受する能力や生涯にわたって健やかに逞しく生きるために必要な知識や技能を身につけなければならない。教養課程でスポーツ科学や健康・体力科学を学ぶ意味は大きい。

③最近の大学生における身体の脆弱化が危惧される。近年の大学新入生の体力は顕著に低下している。したがって、少なくとも週1回、定期的に体育実技を継続する必要性はこれまで以上に高まっている。

④最近の若者の生活空間や生活体験は激変し、現実空間での直接体験が減少する一方で、情報空間でのバーチャルな体験が急増している。とくに、仲間と協力して運動するような直接体験が不足しており、その結果としてリアリティーの形成が不十分で、他者との共感

## 資料— 4

平成11年度 東京大学教養課程「スポーツ・身体運動」・「身体運動実習」に関する外部評価報告から

### 大学で「体育の実技」が必修であるべき理由

- 1) ヒトは、18歳になってようやく形態的にも、機能的にも完態に達する。まだ十分な発達段階に達していない。また、その後10年間は、身体的能力がさらに向上する可能性が高く、大学生の年齢に達してなお、それまで以上に「体育実技」によって身体的能力を高める必要がある。
- 2) 小・中・高校までの体育は、主として発育・発達刺激として必要な身体運動であり、必ずしも十分なものではない。大学生に達した時期に、これからの長い人生を視野に入れ、生涯にわたってスポーツ運動の楽しさを楽しむ能力や生涯にわたって健やかに逞しく生きるために必要な知識や技能を身につける必要がある。教養課程で「スポーツ科学」「健康・体力科学」を学問的に学ぶ意義は極めて高い。
- 3) 最近の大学生の身体の脆弱化が危惧される。近年の大学新入生の身体的能力は顕著に低下しており、身長は伸びているが皮下脂肪の増加傾向がみられ、体力（持久力、柔軟性、筋力など）の低下が著しい。したがって、少なくとも週に1回、定期的に体育実技を継続する必要性はこれまで以上に高まっている。
- 4) リアリティの欠如が危惧される。近年、若者の生活空間や生活体験が激変しており、自然・現実空間での直接触知体験が減少し、情報空間でのバーチャルな体験が急増している。とくに、屋外で仲間と身体を精一杯使って運動をするような、直接体験が不足している。したがって、リアリティの形成が不十分であり、他者との共感もてず他者との関係や他者理解が乏しい状況が指摘される。「体育実技」の授業を通して仲間と身体を使って共に学ぶ活動や経験は不可欠である。

がもてず、他者との関係づくりや他者理解が乏しい者が増えている。それに対応できる重要な教育機会として体育実技がある。「体育実技」の授業を通して仲間と身体を精一杯使い、自他の身体感覚を養いながら共に学ぶ活動や経験は不可欠である。

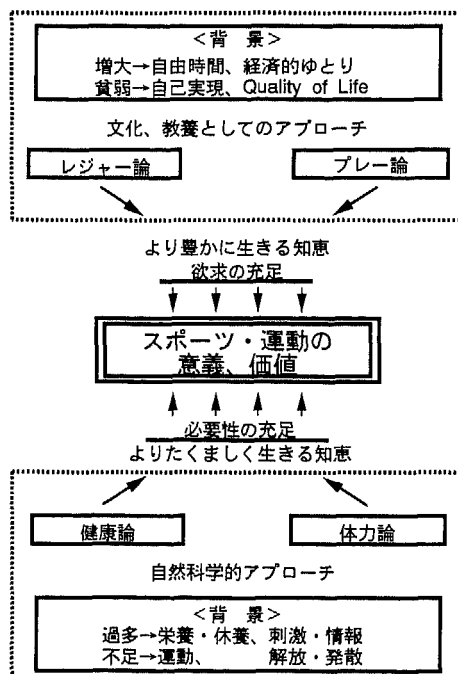
## ●本学の共通体育のカリキュラムについて

### ◇共通体育の目標について

資料— 5は、現在の共通体育シラバスの冒頭に掲載されている図です。共通体育の目標を設定するに当たって、大学体育の目標を人間がスポーツ・運動をすることの意義と価値という面から捉えようとしたものです。我々がスポーツや運動をする意義・価値は、一つには、欲求充足としての意義・価値です。我々が生涯にわたってスポーツを楽しんだり、運動の喜びを感じたりするということはとても大切なことで、そういう欲求を充足するものとしてスポーツ・運動がある。その価値から考えると、より豊かなオリエンティエー・オブ・ライフを形成するために、スポーツ・運動を学ぶ必要があるというものです。

もう一つは、これから急速に高齢化が進む中で、サクセス・エイジングや健康寿命の延長が求められているわけですから、必要性の

## 資料— 5



## 資料一 6

### 筑波大学の「体育」で 何を学ぶのか

#### ◎ より豊かに生きる知恵を学ぶ

生涯にわたって、スポーツの楽しさを享受するための知恵と能力を身につける

#### ◎ より健やかに、遅く生きる知恵を学ぶ

生涯にわたって、より健やかに生きるために、運動による健康・体力づくりの知識・実践力を身につける

充足としてスポーツ・運動が不可欠となります。そのためには、生涯にわたってより健やかに、より遅く生きるために必要な科学的な知識や方法を学ぶ必要があるということです。

このような視点から、本学の共通体育では資料一6のような二つの目標、すなわち、(1)より豊かに生きる知恵を学ぶ、(2)より健やかに、より遅く生きる知恵を学ぶ、があげられた訳です。このシラバスを作成した一人としては、非常に気になっていまして、今後さらに検討されることを願っています。

◇共通体育の学習内容、学習の発展系列について

カリキュラムを作っていく上で基本になるのは、「どんな学習領域 (scope) を、どのような順序 (発展系列: sequence) にしたがって学ぶのか」ということでしょう。したがって、カリキュラムでは、いろんな学ぶべき内容があるとともに、発展系列という学習の順序が問題となります。例えば小学校の学習では、どんな教科 (学習内容) を、どのような順序で1年生から6年生まで学ぶのが明確になっていなければなりません。大学体育のカリキュラムにおいても、1年生から4年生 (あるいは、2年生) まで何をどのような順序で学ぶかという構想がなければならないの

は当然です。そこで、本学の共通体育の学習領域と発展系列についてはどんな問題があるのかを検討してみる必要があります。

現在の共通体育の学習領域は2つに分けられています。ひとつは、「生涯スポーツ実習」という名称になっている、いわゆる「実技に関する内容」です。もう一つは、「生涯スポーツ理論」、すなわち、「講義に関する内容」です。この2つの内容が柱になっています。生涯スポーツ実習 (実技) には、①スポーツ・ダンス関連の実技 (バレーボール、テニス、ジャズダンス、・・・など) と、②健康・体力づくり関連実技 (体操トレーニング、Jog & Walk、・・・など) があげられています。これに関連する運動分類論については今後再検討されてもいいと思います。

生涯スポーツ理論の方は、①プレー・レジャー論としての生涯スポーツ理論、②健康・体力づくりとしての生涯スポーツ論、③スポーツ能力開発のための生涯スポーツ論、の3つがあります。①は人文社会科学、あるいは、文化的な視点から生涯スポーツに関する理論を学ぶものであり、②は自然科学、あるいは生物学的な視点から健康・体力づくりのための理論や方法を学ぶものです。そして、もうひとつの③スポーツ能力開発の生涯スポーツ理論は、開設されているそれぞれのスポーツ種目の授業の中で、運動学の視点から、スポーツ技能習得のための理論を学ぶというものです。現状では、①と②の理論については1年次に実施されており、③については、それぞれの授業の中で取り入れられることになっており、担当教官の裁量に任されているのが実状です。

ところで、もう一つは学習の発展系列の問題です。学年進行にともなうどのような順序で学ぶのかということについては、これまでいろいろ議論しましたがけれども、明確にすることができないままに、学年進行による違いを何らかの形式で示すために、やむを得ず「学

年目標」として文章で示すことにしたわけです。現在シラバスの中に記載されている学年の目標はご存知の通りですが、1年生では運動の意義や価値に気づき、スポーツや運動に接近していく態度を形成すること、また、体力テストや体力づくりの理論・実習によって自己の健康・体力に対する認識を深めることが目標になっています。2年生では、もう少しスポーツに関する知識を深めて、スポーツ技能の習熟を図り、本当にスポーツを楽しく自分で享受できるような能力を高めること、そして、それぞれの運動種目で基本的な能力とゲーム能力を高めていくことを目標にしています。さらに、3・4年生では、スポーツの技能を高めるとともに爽快感を味わい、スポーツの価値を本当に実感できるようにすること、学習を通してお互いの親睦を深め、

### 資料一 7

#### 生涯にわたってスポーツ運動を 楽しむためのステップ

##### ステップ 1

スポーツ運動への接近  
スポーツの価値に気づき、スポーツに接近して  
いく態度

##### ステップ 2

スポーツ技能の形成  
いままでできなかった運動が、ある程度できる  
ようになり、楽しいと思える

##### ステップ 3

達成、自己実現の実感  
できるようになったスポーツ運動を使って何か  
が達成され、自己の内面にはねかえってくる喜  
びが実感できる

##### ステップ 4

スポーツの楽しさの共有、  
プレー世界の共通体験  
他人と一緒にスポーツする楽しさがわかり、プ  
レーの世界を仲間と共有することが価値ある時  
間として生活の中に定着する

自己開発、自己実現が図れるようにすること、  
また、自分に合ったスポーツを選択して、生  
涯にわたって楽しめるように技能を高めるこ  
とを目標にしています。このように学年別に  
目標を書いています。作文に過ぎず、とて  
も学習の発展系列を示したものにはなってい  
ないのが現状です。

実は、この学年目標を書くときに依拠した  
のは、「生涯にわたってスポーツ・運動を楽し  
むようになるための4つのステップ」として  
示されたもの（資料一 7）でした。

この学年目標の背景にあるのは、学年進行  
にともなってスポーツ・運動の実践が定着し  
て、生涯スポーツにつながっていくことを望  
んでの作文だった訳です。

そのステップをあげれば、第1に、スポー  
ツ・運動に接近する段階：とにかくスポー  
ツの価値に気づいて始めないことには良さもわ  
からないという段階。第2は、スポーツ技能  
の形成段階：スポーツ技能がある程度できる  
ようになり、楽しいと思えるようになる段階。  
第3は、技能が達成され、自己実現につな  
がる段階：スポーツを楽しんだ結果、自己の内  
面にはね返ってくる喜びが実感できるよう  
になる段階。第4は、スポーツや運動の楽し  
さを1人だけではなく、仲間と共有できる  
段階：プレー世界の共通体験をお互いに持  
ち合い、仲間とスポーツをする時間が価値  
あるものとして定着する段階。

以上のような、現在の共通体育のカリ  
キュラムには、さらに検討しなければなら  
ない多くの課題があります。

#### ●東京大学の教養体育について

##### ◇教養体育の改善について

平成11年度に、東京大学の教養課程の体育  
教育について外部評価が行われました。その  
外部評価に委員として関わりましたので、東  
京大学の体育について概略を紹介します。

多くの大学で教養の体育が衰退していく中



で、東京大学では教養課程において全学生に体育を必修として、実技と講義を履修させているので、参考になると考えます。

東京大学では、外部評価の後、外部評価報告書が出されております。それによりますと、外部評価を受けての教養体育の改善点は、資料一8のように要約できます。

まず、これまで以上に『講義と実技を組み合わせた授業』を創設することをあげています。すなわち、実技だけ、講義だけというのではなく、実技と講義を組み合わせた授業に

していこうというのが基本的な考え方です。それは、健康・生命科学、生理学、バイオメカニクス、スポーツ医学などを基にした『身体と運動に関する講義』を行うとともに、それらの講義と融合した形で『スポーツ・身体運動の実習』（体育実技）を行うというものです。

そのための6つの具体的な接近法をあげています。以下にその要点をあげておきます。

①身体知への導入：最も身近な学問対象である自己の身体を対象に、親しみのある身体運

## 資料一8

### 外部評価後の東京大学における教養体育の改善

『講義と実技を組み合わせた授業』を創設する。

- 1) 健康・生命科学、生理学、バイオメカニクス、スポーツ医学などを基にした「身体と運動に関する講義」を行う。
- 2) それらの講義と融合した形で「スポーツ・身体運動実習」（実技）を実施する。

そのための6つの具体的な接近法

#### ①身体知への導入

最も身近な学問対象である自己の身体を対象に、親しみのある身体運動をテーマにして「知の実践」の魅力を伝える。基礎的な教養として、まず自分の身体に目を向けさせる。

#### ②ヒトの身体運動の（理学的）知の実践

生理学、生命科学、医学、健康科学などの自然科学的な視点からヒトの身体運動の知を実践し、生物や機械との共通点や相違点などを理解し、ヒトの特性をつかませる。

#### ③人間の身体運動の（文科的）知の実践

自然科学的に理解されるヒトの身体運動は、同時に文化的な価値を生み出し、保有している。身体を主体、客体、インターフェースとしてとらえ、人文・社会科学的視点から人間の身体運動の文化的な知の実践を実施し、固有の身体観や健康観を獲得させる。

#### ④精神と身体による実習での知の実践

精神（言語知）と身体（身体知）の双方による知の実践を通じて、知の概念を発展させる。自己の身体を使って運動を行うことによって最も深い本質的理解である「肌でわかる、身体で覚える」ことを理解させる。

#### ⑤スポーツ文化・身体操作技能の教授

仲間との実技の中で、他者との動きの違いを体感し、自己の動きを改善し身体能力の向上をはかる。また、リアリティーの欠如に起因する問題が生じているが、自己の身体を使った直接体験により、これを改善させる。

#### ⑥生涯教育としての心身の健康教育・運動習慣の基礎づくり

自覚されにくい「能力の低下」の検出と改善方法を提示し、今後の高齢化社会に向けて極めて重要な課題であることを理解させる。

これらの考え方を基に、身体運動を核とする実習を行うことの意味を「講義」を通して理解させ、「スポーツコース、トレーニングコース、スポーツ医学コース、スポーツ科学コース」（体育実技）を実習させ、「もともと本来的に学ぶべき教育」としての教養体育を明確なものにしていく。

動をテーマにして、「知の実践」の魅力を伝える。基礎的な教養として、まず自分の身体に目を向けさせる。

②ヒトの身体運動の「理学的」知の実践：生理学、生命科学、医学、健康科学などの自然科学的な視点からヒトの身体運動の知を実践し、生物と機械との共通点や相違点などを理解し、ヒトの特性をつかまえさせる。

③人間の身体運動の「文科的」知の実践：自然科学的に理解される人間の身体運動は、同時に文化的な価値を生み出し、保有している。身体を主体、客体、インターフェースとしてとらえ、人文・社会学的視点から人間の身体運動の文化的な知の実践を実施し、固有の身体観や健康観を獲得させる。

④精神と身体による実習での知の実践：精神（言語知）と身体（身体知）の双方による知の実践を通じて、知の概念を発展させる。自己の身体を使って運動を行うことによって、最も深い本質的理解である「肌でわかる、身体で覚える」ことを理解させる。

⑤スポーツ文化・身体操作技能の教授：仲間との実技の中で、他者との動きの違いを体感し、自己の動きを改善し、身体能力の向上を図る。また、リアリティーの欠如に起因する問題が生じているが、自己の身体を使った直接体験によりこれを改善させる。

⑥生涯教育としての心身の健康教育・運動習慣の基礎づくり：自覚されにくい「能力の低下」の検出と改善方法を提示し、今後の高齢化社会に向けて極めて重要な課題であることを理解させる。

以上のような考え方に基づいて、身体運動を核とする実習を行うことの意味を「講義」を通して理解させ、「スポーツコース、トレーニングコース、スポーツ医学コース、スポーツ科学コース」（いずれも体育実技）を実習させて、「もともと本来的に学ぶべき教育」としての教養体育を明確なものにしていくとして、その改善点をまとめています。

そして、その改善策のひとつとして1年後には新たなテキスト（東京大学身体運動科学研究室 編『教養としての スポーツ・身体運動』 東京大学出版会 2000）が出されています。今年からは、これがテキストになって、全員がこれを使って授業をやっているそうです。このような教養体育の改善に向けての実践と努力は、大いに参考になると思います。

#### ◇東京大学の教養体育の概要

そこで、東京大学の体育カリキュラムの概要を紹介しておきます。

まず、目的は、「個人の健康・体力の状態、運動技術のレベルや好みに応じて各種の運動を合理的に実践し、次のような目的を達成しようとするものである。①健康保持・増進、②体力の維持・向上、③運動技術の獲得と改善、④運動する喜びの享受、⑤社会性の育成、⑥生涯にわたる健康管理とスポーツ実践への動機づけ、⑦病気の療養と回復。」となっています。印象としては、きわめて網羅的であると思われます。先述したような改善の趣意などと関連すれば、もう少し端的に特徴を示しても良いのではと考えます。

ついで、体育の内容ですが、1年次は基礎科目というのがあって、その中に『スポーツ・身体運動』というのが開設されています。これは必修の実技科目です。筑波と違って前期、後期制ですから、前期に1単位1科目、後期に1単位1科目、合計2単位が必修です。

まず、健康診断と体力テストを行い、その結果を科目選択するための資料にすることになっています。必修実技科目には、4つのコースが開設されています。まず一つは、スポーツコースで、これは固定時間割で行っているわけですが、テニス、サッカー、ソフトボール、バレーボール、バスケットボール、バドミントン、卓球、ハンドボール、陸上競技、合気道などです。次は、フィットネスコースですが、これは、特に低体力の人を対象に優先させて体力トレーニングをする科目です。

さらに、サイエンスコースというのがあり、スポーツ科学を実習で学ぶ科目です。例えば、「筋力を測定する」という授業では、グループ学習を行っており、筋力測定器を多く設定しておいて、グループ毎に測定し、結果を分析し、考察してレポートを書いて出すという授業です。要するに、自分の身体を、実際に自分が測定し、その結果をデータ処理して、何が問題かということを理解するという授業です。それから、特別身体運動コースというがあります。疾病とか障害によって特1から特3まであって、例えば、身体的あるいは精神的な問題で実技ができない人を対象にして特別のプログラムを作っています。本学の「トリム運動」を、対象学生の状況に即して3種類に分けた授業開設となっています。各コースでは、授業の1時間目に講義を行い、その後は実技の授業で、最後にもう一回講義をします。したがって、前期の最初に講義、前期の終わりに講義、そして後期の終わりにもう一回講義ということまでまとめているようです。

2年次では、「総合科目」という開設の中に「身体運動実習」(選択実技科目)があり、前期2単位まで、後期2単位まで、したがって合計4単位まで選択して履修することが可能です。要するに、体育が好きな人は前期に2種目、さらに後期に2種目、計4種目を履修することも可能になっています。どの程度履修しているか、最近の状況を聞いたのですが、50~60%ぐらいの2年生が取っているということです。ご存知のように、東京大学は教養課程が終わると専門課程への進学振り分けがあります。3年生以降、何学部のごくへ進むかというのが教養課程の成績で決まるわけですが、その成績はAが多くあった方が有利な訳です。そのAを取るには体育が非常に有利で、体育は出席さえすればAが取れるという理由もあって2年生の体育履修がかなりあることは事実のようです。2年次の前期までの

成績が進学振り分けに関連するので、2年次の体育履修は、前期は多いけれども後期になるとぐんと減るとというのが実態だそうです。トータルしますと50~60%のようです。2年生対象の「身体運動実習」では、テニス、サッカー、バスケットボール、ソフトボール、バレーボール、卓球、バドミントン、トレーニング、合気道、ファットバーニング、インテリジェントボディ、ゴルフ(一部集中)、スキー(集中)、トレーニング実習(集中)などがあります。もうひとつは、「身体運動科学・健康スポーツ医学」(選択講義科目)があります。2年生で実技ではなく、講義を選択して履修する学生もいるわけですが、これが充実していて、スポーツ医学と筋肉の科学、トレーニングの生理科学的基礎と実際、巧みな動作と運動制御、スポーツの医科学、身体運動科学、スポーツ・トレーニングの基礎と応用、など多くの授業が開設されています。しかし、これらの科目は専任教官の専門性と関連してか、自然科学に偏っていることは確かです。

3年生、4年生には、専門課程の本郷において「スポーツ・トレーニング」という名前で履修希望の学生が選択して取れるようになっています。履修者は多くないようですが、バレーボール、水泳、バスケットボール、サッカー、トレーニングなどを、駒場の教養学部の先生が本郷へ行ってサービスをして開設しています。

これらの他に、「全学自由研究ゼミナール」という授業があります。これは、誰でも履修できる自由科目で、運動分子生物学入門、100メートルを速く走るゼミ、ボディーワーク、スポーツフィッシングなどが開設されています。

#### ●今後のカリキュラム検討の問題点

おわりに、資料-9のように、本学における今後のカリキュラム検討の問題点をあげておきます。

## 資料—9

### 今後のカリキュラム検討の問題点

- カリキュラムの理念・目的は？  
大学の教育内容として、大学生（まだ発育・発達は完了していない）を対象として、筑波大学の独自性として、どのような理念・目的を掲げるか？  
小・中・高の体育との関連，身体機能の脆弱化，リアリティーの欠如，高齢社会，Quality of Life，Productivity
- 何（学習領域：Scope）を教えるのか？  
実技・実習の内容，理論・講義の内容，実技と理論の関連 or 融合（テーマユニット化）  
実技中心型 演習（理論・実技融合）型 講義中心型
- どのような順序で（発展系列：Sequence）教えるのか？  
2～4年間どのように学習を展開するのか？（1年次のオリエンテーションも含めて）  
学習内容（知）の系統性 or 一貫性  
はじめ→なか→おわり（達成目標）  
スポーツ運動への気付き→技能形成→達成→定着→楽しさ・価値の共有→生涯スポーツの  
実践
- 授業の開設形態は？ 学期完結型への対応はどうか？  
通年型 学期完結型 集中型 複数科目開設型  
チームティーチング型 課題解決型  
学群・MCの授業との関連（大学院体育も含む）
- 共通体育は誰が，どのように担当していくのか？  
定員削減問題，授業内容の専門性（実技，講義，演習），体育系教官の連携・協力関係
- 共通体育に関する情報公開やIT化への対応をどうか？  
インターネット学習

まず，共通体育の理念・目的の問題です。大学生とはいえ，まだ発育・発達が完了していない人間を対象にして，筑波大学の独自性としてどのような理念・目的を掲げるかということを再検討する必要があります。そのためには，「小，中，高校の体育との関連」，「最近の学生における身体機能の脆弱化」，「リアリティーの欠如」，「高齢社会」，「Quality of life」などがキーワードになるかと考えます。第2は，何を教えるかという学習内容の問題です。実技・実習の内容，理論・講義の内容，実技と理論の連携や融合，などが検討されるべきでしょう。以前に，テーマユニット化が提案されましたが，今後，実技中心型でいくのか，理論・実技融合の演習型でいくのか，講義中心型でいくのか，それらをどのような

バランスで開設していくのかを検討する必要があります。第3は，どのような順序で学習させるのかという問題です。1年次の1学期におけるオリエンテーションでの学習内容やその順序も含めて，1年生から4年生までの学習の発展系列を考慮することは大切だと思います。達成目標をどこに置いて，何から始めて，どう展開して，どのように終了するのかを明確にできればいいのではないかと思います。生涯スポーツを指向するとすれば，スポーツ・運動への気付き→スポーツ技能の形成→技能の達成，定着化→スポーツの楽しさや価値の共有→生涯スポーツの実践，のような流れを重視することも考えられます。第4は，授業の開設形態の問題です。大学全体が学期完結型に移行するとすれば，その対応と

も関連して、学期完結型、通年型、集中型、複数種目開設型、チームティーチング型、課題解決型など、いろいろと検討をしてみることが求められます。第5は、共通体育は誰が、どのように担当するのかという問題です。定員削減問題も迫っていますし、担当教官の専門性との関係や体育センター以外の教官との連携協力という問題もあります。柔軟に対処していく必要があるでしょう。最後は、共通体育に関する情報公開の促進やIT化への対応をどうするのかという問題です。例えば、体育の学習内容や学習方法に関する充実したホームページの開設の問題、あるいは、イン

ターネット学習が実現するとすれば、共通体育においてもそれに即応した学習カリキュラムをどうするのかという問題など、検討すべき課題は多いと思います。

今回体育センターのFDでお話をする機会を得ましたことを感謝致します。21年間の体育センター勤務の経験をもとに共通体育のカリキュラムの問題について自由な立場で述べさせていただきました。いささかなりとも参考になるところがあれば幸甚です。本学の共通体育のさらなる発展を心から祈念しておわりといたします。